

本科 2 期 9 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 難関大 国語



【問題】（演習）

出典：『更級日記』／東京学芸大学・86年

現代語訳

（父は、）陰暦七月十三日に（任地である常陸国）に下向していった。（出発の）五日前にもなると、（父は、）私と対面するのもかえってつらいらしく、私の部屋にも入ってこない。まして、（出発の）当日は（準備で忙しく）取り込んでいて、（出発の）刻限になったので、これでもうお別れと、（父は、私の部屋の）すだれを引き上げて、（私と）ちょっと顔を合わせ涙をはらはらと落として、そのまま出てしまったのを見送る（私の）気持ちは、目は涙でくもり心乱れて、（私は）そのまま我知らず突っ伏してしまったところ、都に残る召使の男が父を見送って帰ってきたが、（その男に託して）懐紙に、

思ふこと……もし、私の願うことが心に思うとおりに実現する身であったならば、（もの寂しい）秋に人と別れるという情趣を深く味わったであろうのに（自分の意志ではない赴任の悲しみで胸がいっぱいで、その情趣を味わう余裕もないことだ）とだけ書いてあるのを、（私は悲しくて）最後まで見ることができない。たいしたことのない普通の時には、腰折れで上の句と下の句のつながりの悪い下手な歌も次々と考え付いたのだが、（今はこのうえなく悲しい時なので）何とも表現するのにふさわしい言葉も思い浮かばないままに、（私は、）

かけてこそ……全く思っても見なかったことです。現世で、ほんのしばらくの間だけでもお父様とお別れする時があるなどとは、我知らず返歌を書いたのだろうか。ますます人の訪れもなくなり、さびしく心細く、ほんやりと物思いに沈んで、（お父様は）今ごろどの辺りを旅しておられるかと一日中父のことに思いをはせる。道中の有様も覚えているので、はるかに恋しく、また心細いことはこの上もない。夜明けから日の暮れるまで、私は父の旅ゆく東方の山向こうの空を見ながら物思いに沈んで日を過ごした。

問1 (ウ)・(エ)

問2 (エ)

問3 (ア) けれ / (イ) しか

問4 その時は悲しみのあまり心が動転しており、確かに書いたという記憶がないから。〔解答例〕

問5 (エ)

問6 父親の旅立っていった常陸国が東方にあるため、東の山際を眺めつつ、父の道中の身を案じて物思いにふけている。〔解答例〕

出典：『更級日記』「野辺の笹原」／ 亜細亜大学・経済学部・88年

現代語訳

その(年の)五月の一日に、姉が、子供を産んで亡くなってしまった。他人のことでさえ、(人の死というものは)幼い時からたいそうしみじみと悲しいと思いつけてきたが、(この度は肉親の姉のことであるから)まして言いようもなく、しみじみと悲しいと思いつくはずにはられない。母などは皆、亡くなった(姉の)部屋にいたので、(私は姉の)形見として残された幼い子供達を左右に寝かせていたところ、破れた板葺きの屋根の隙間から、月(の光)が洩れてきて、子供の顔にあたっているのが、たいそう不吉に思われるので、(その子の顔に)袖をかぶせて、もう一人(の子)も抱き寄せて、(あれこれ)思うとたいそう悲しい。

その期間(「当座の法事など」が過ぎて、親戚のところから、「亡き人(「姉」)が『必ず探して送ってください』と言ったので、探したが、その時は、見つけれずじまいだったのに、(亡くなった)今になって、(ある)人が(見つけて)よこしてくれたのが、しみじみと悲しいこと(です)」と言つて、「かばねたづぬる宮」という物語を送ってくれた。本当にしみじみと悲しいことよ。

(その)返事に(私は次のように詠んだ)、

うづもれぬ……(この世に)埋もれずに(残つて)いた「かばね(たづぬる宮)」(などという不吉な書物)を、(姉は)どうして探し求めたのでしょうか。苔の下で(姉本人の)身こそがかばねとなって(むなしく)埋もれてしまいました。

(姉の)乳母であった人が、「(お嬢様が亡くなった)今となつては、どうして(このお屋敷に残ることができましようか)」などと(言つて)、泣く泣く、もと住んでいた所(「実家」)に帰っていくので、(その乳母に私は次のように詠んだ)

「ふるさとに……実家にこのようにあなたは帰つてゆくのですね。(これも姉の死ゆえと思うと姉の死は)ああどのような悲しい別れだったのでしょうか(「ああ何という姉との悲しい死別であったのでしょうか」)。」

(あなたは)亡き姉の形見として、何とかして(この家に居残つてほしい)と思ひます」などと言ひ送つた(その)返事に、(乳母は次のように書いてきた)

慰さむる……干渴のない波打ち際で浜辺の千鳥が足跡を留めることができないうちに、(ご主人を亡くして)慰めるすべもない私

は、どうしてもこの（思い出だけが残る）つらい家に留まることができず、いやできません。

解答

問 1 ① 自発 ② 過去 ③ 打消 ④ 過去の原因推量

問 2 (a) C (b) D 問 3 D

問 4 F 問 5 乳母なりし人〔本文9行目〕

問 6 乳母なりし人〔本文9行目〕

解説

問 1 文法問題。助動詞の識別問題。接続からどのような助動詞であるかを確定し、次に文脈からふさわしい意味を判断する。

① 上にある「思ひ歎か」はカ行四段活用の動詞「思ひ歎く」の未然形なので、傍線部は助動詞「る」の終止形。「る」には受身、尊敬、可能、自発の四つの意味があるが、「思ひ歎く」のような心情を表す動詞に接続している時は、自発を表すことが多い。自発は、意識的ではなく、自然とそうになるという意味で、ここでは「自然と思ひ歎く、思ひ歎かずにはいられない」といった意味になる。

② 上にある「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形なので、②は助動詞「き」の連体形。「き」の意味は一つで、直接体験の過去を表す。親戚の人自身が「かつて見つけることができなかつた」というのである。

③ 上にある「うづもれ」はラ行下二段活用の動詞「うづもる」の未然形か連用形。未然形に接続する「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形であり、連用形に接続する「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形である。そこで、③の下をみると、体言「かばね」が続いている。体言に接続するのは連体形であるから、傍線部は連体形であり、したがって打消を表す。「かばね」はここでは「かばねたづぬる宮」という物語を指し、「世間に埋もれることがなく、見つけることのできた物語」という意味になる。

④ 上にある「たづね」はナ行下二段活用の助動詞「たづぬ」の未然形か連用形。傍線部は連用形に接続する助動詞「けむ」の連体形と考えられる。「けむ」には過去推量、過去の原因推量、過去の婉曲・伝聞という三つの意味がある。ここでは、「何に」という「どうして、なぜ」という意味の疑問語があり、「どうして探したのだろう」と理由を推量しているので、過去の原因推量の意味を表している。

問2 解釈問題。まずは傍線部を正確に口語訳し、その上で状況や場面を考慮して最適な意味内容の選択肢を選ぶ。

(a) について。傍線部の「あはれ」は感動詞で「ああ」という感動の気持ちを表す。「いかなる」は形容動詞「いかなり」の連体形で、「どのような、どういう」という意味を表す。「別れ」は名詞で、現代語と同じ意味。「なり」は体言に接続しているので、断定の助動詞「なり」の連用形であり、「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「ああ、どのような別れであったのだろうか」となる。次に、「別れ」の内容について考える。傍線部を含む歌は、作者が実家に帰っていく乳母に向けて詠んだもの。ただし、この「別れ」を乳母との別れと考えると、今現在別れるのであるから、過去推量「けむ」が用いられているのは不自然である。また、乳母は主人が亡くなったのでこの家を去ると言っているのだから、どのような別れと疑問が出てくるのも状況にそぐわない。そこで、過去における別れということで、この「別れ」は姉との死別を指すと考えられる。姉との別れは姉一人に留まることなく、乳母との別れまでも引き起こした。そうした姉の死別の意味に思い至り、改めてその死別の悲しみを味わっているのである。

選択肢AとDの「なのででしょうか」、Bの「ことができましょう」はいずれも過去の時制ではなく、過去推量「けむ」が訳出されていない点で、まずは不適切。さらに、AとDは「あなたとの別れ」とあり、「別れ」を乳母との別れと解釈している点も不適切。またBの「たとえる」という意味を表す語は傍線部ではなく、そのように解釈をすることもできないので、やはりBも不適切である。

(b) について。傍線部の「なに」は疑問や反語を表す副詞で「どうして、なぜ」という意味であり、「か」も同じく疑問や反語を表す係助詞。「うき世」は「憂き世」と考えられ、「つらくはかないこの世」という意味。「跡もどむ」は「足跡を留める」という意味から、「その場に残る」と解釈できる。「む」は推量の助動詞「む」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「どうしてつらいこの世に留まることができようか」となり、自分のことを言っているのだから、「いや、できない」と反語で解釈するの

が適切。この表現だけを見ると、もうこの世で生きていくことはできないと言っているようにも思えるが、傍線部を含む歌は、実家に帰らぬように引き留めた作者に向けての、乳母の返事である。そこで、「憂き世」は広くこの世を指すのではなく、乳母の主人にあたる姉との思い出だけが残るつらいこの家を指していると考えられる。そこで、傍線部の解釈は「どうしてつらいこの家にとどまることができずしょうか、いやできない」となり、乳母はあくまでも実家に帰りたいという気持ちを表しているのである。選択肢AとBは「なにか」の解釈が不適切。「なにか」には「どうかして」という願望の意味はなく、また「あれこれ」という意味内容はここでは不適切。また、Cは先にも見たように「憂き世」を広く「この世」と考えて、もはや生きてはいけないと解釈している点が不適切。

問3

古語の意味の問題。一つの単語がさまざまな意味を表す場合は、文脈を丁寧にたどって、その場にふさわしい意味を判断する。

「ゆゆしく」は形容詞「ゆゆし」の連用形である。「ゆゆし」は神聖の意を表す「斎(ゆ)」を重ねて形容詞化したもので、「神聖で恐れ多い」という意味を表す。また、「不吉である、縁起が悪い」、「良い意味でも悪い意味でも程度がはなはだしい」といった意味がある。傍線部は、寝ている子供の顔に月の光が当たっているのを見た作者の気持ちである。子供の寝顔が青白い月の光を浴びて、まるで死人の顔のように見えたのであろう。折しも、子供の母親が亡くなったばかりであるから、作者は不吉だと思ったのである。そこで、傍線部の「ゆゆしく」は「不吉に」という意味である。

選択肢を順にみていく。

Aは、立派な大社、すなわち出雲大社を人々が参拝して、信仰心を起こしたのであるから、傍線部は良い意味で「非常に深い」と信仰心を説明している。「ゆゆしく」は程度がはなはだしい意味を表している。

Bは、世の中が大殿の思いのままであるという状態についての説明である。「大殿」のことを作者がどのように思っているかでさまざまな解釈が成り立つが、一般には「たいそうすばらしい」という良い意味にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Cは、光頼卿が信頼の上座に着席なさった時の様子である。ここでも、二人が置かれている状況や二人の人間関係がこの短文からでは読み取れないので、解釈が難しいが、一般には上座に座った堂々とした姿が「たいそう立派ですばらしい」という良い意味にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Dは、道中、雨が降るのではないか、雷が鳴るのではないかと思つた時の気持ちを表している。その後仏にも祈つてゐるところから、天候の悪さが「とても不吉で」悲しく思われたと解釈できる。そこで、傍線部は「不吉で」という意味を表し、したがつてこれが正解となる。

問4

空欄補充問題。選択肢はすべて助動詞なので、接続が適切なものをまずは選び出す。次に、空欄にあてはまる活用形から、選択肢をしぼり、最後に文脈から最適な意味を表すものを見つけ出す。

空欄の上にある「なり」は、ラ行四段活用の動詞「なる」の連用形。そこで、選択肢から連用形接続の助動詞を選ぶと、AとBを除いた残りすべてとなる。Bの推量の助動詞「めり」と、その連体形であるAの「める」は終止形接続。ただし、ラ変型の語の場合は連体形接続となる。また、Cの「たり」と、その連体形であるDの「たる」は連用形に接続する場合は断定ではなく、完了の意の助動詞ということになる。

次に空欄にあてはまる活用形を考える。空欄の上には係助詞「こそ」があるので、係り結びの法則から、空欄には「こそ」の結びとなる已然形の語が入るはず。そこで、選択肢C～Hの中から已然形のものを選ぶと、Fの「けれ」一つしかない。「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形である。もつともこの歌の中では詠嘆を表している。したがつて正解はFとなる。

なお、念のため、残りの選択肢をみておく。Eの「ける」は「けり」の連体形、Gの「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、Hの「けむ」は過去推量を表す。

問5

内容理解の問題。まずは古語単語の意味を正確に押さえた上で、文脈から、誰を指しているのかを読み取る。

「形見」とは、「死んだ人や別れた人の残したもの」、あるいは「過ぎ去つた昔を思い出すてがかりとなるもの」を意味する。ここでは「昔の形見」とあるが、「昔」とは作者の姉が元気に生きていた時を指す。そこで、「昔の形見」とは、亡くなった姉を思い出すてがかりとなる人物ということになる。この言葉は、作者の乳母に向けての手紙の中にある。作者は、乳母とも別れなければならなくなつた姉との死別をあらためて悲しむ歌を記した後で、「昔の形見には、いかでとなむ思ふ」と言葉を続ける。「いかで」はここでは願望の意を表し、その後に省略されている意味内容を補うと、「何とかして、この家にとどまてほしい」と解釈できる。作者が乳母を実家には帰さず、この家に留まるよう説得しているのだから、亡くなつた姉を思い出す手がかりになる人物とは、乳

母のことである。姉は亡くなってしまったものの、姉の世話をしていた乳母がいれば、いつも姉を思い出すことができる。だから、いつまでもこの家においてほしいというのである。

したがって正解は、文中の語を使って、「乳母なりし人」となる。

問6 内容理解の問題。ここでは和歌の解釈が問われている。下の（注）に掛詞の説明があるので、それも参考にして、この歌の内容を正確に読み取ることが必要である。

まずは「浜千鳥」を文字通り、「浜辺にいる千鳥」の意味でとらえて歌の解釈を試みる。「浜千鳥」に関係のあるものとして、「かた」は「干潟」の意味、「なぎさ」は「渚」と「無き」の両方の意味で考える。すると、この歌は「干潟もない波打ち際の浜千鳥は、どうして足跡をとどめることができるでしょうか、いやできません」となる。「なにか」はここでは反語を表している。

設問から「浜千鳥」は誰か、人をたとえたものなので、次に、この歌を人間に置き換えて解釈し直してみる。今度は、「かた」を方法の意味で、「なぎさ」を「無き」の意味で考えると、「慰める方法もないのでどうしてこのつらい家に留まっていられるでしょうか、いやできません」となる。とどまることができなの、浜千鳥と同じだというのである。そこで、慰める方法もないということから、主人にあたる姉の死を悲しんでいる乳母の姿を想像できる。そもそもこの歌は、乳母が詠んだもので、この家に残ってほしいという作者の言葉に対する返事である。乳母は悲しい自分の気持ちを慰めようもないので、思い出の残るこの家には留まれないと断った。乳母は自分自身を浜千鳥にたとえることで、留まれるはずのないことを訴えているのである。したがって、文中の語を使うと、正解は「乳母なりし人」となる。

《補充問題》

現代語訳

- 問1 (1) 刑部卿敦兼は、容貌がとても醜い感じの人であった。その奥方は、美しい人であったが、
 (2) 晴明の家の前をお通りになると、晴明自身の声がして、手をはげしく、はたはたと打つようだ。
- 問2 (1) 子供になりなさにちがいない人であるようだ。
 (2) 笛をととても趣深く吹いて、通り過ぎたようだ。
- 問3 (1) 秋の夜は露がことさら寒いらしい。各々の草むらで虫がづらがつているので
 (2) 真夜中となって夜はふけてしまったらしい。雁の鳴き声が聞こえる空のほうへ月が渡って行くのが見えるので
 (3) 気の毒なほどであったようだ。
- 問4 もし世の中になったく桜がなかったとしたら、春の気分はのんびりとしたものであらうに
- 問5 (1) どのようにしようかと思ひ悩む。
 (2) 鏡に、色や形があったとしたら、映らないだらうに。

解答

- 問1 (a) ナリ活用形容動詞「にくさげなり」の連体形語尾
 (b) 断定の助動詞「なり」の連用形
- (c) ナリ活用形容動詞「はなやかなり」の連体形語尾
 (d) 伝聞推定の助動詞「なり」の連体形
- 問2 (i) ラ行四段活用動詞「なる」の連用形
 (b) 断定の助動詞「なり」の連体形

- (ii) (c) 伝聞推定の助動詞「なり」の終止形
- (1) 子供になりなざるにちがいない人であるようだ。
- (2) 笛をととても趣深く吹いて、通り過ぎたようだ。

問 3

- (1) 已然形
- (2) 終止形
- (3) 連用形

問 4

(ア)

問 5

- (1) どのようにしようか
- (2) (もし) あったとしたら、映らないだろうに